

えほんだより

令和4年12月19日発行

まことさつなえ保育園



気付けば、あっという間に今年も残るところ一か月を切りました。今年の“やりのこし”が無いように、今から計画的に進めていきたいのですが…師走はなかなかそうもいきませんね。手を抜けるところは無理をせず、ゆったり過ごして元気に年越したいですね。

ところで皆さん、月末に月刊絵本をお返しする際に同封している“庭新聞”はご覧になっていますか？絵本についてのコラムはもちろん、くすつと笑える小話や子育てのヒントになるようなものも記載されています！今回は、庭新聞の記事より一部抜粋してお伝えしたいと思います。10月号に記載の記事『しつけってなあに？』保護者の皆さんにとっては“しつけの話なんて聞きたくないよ～なんて思う方もいるかもしれませんね。だけど、なんだかじっくり内容だったので、ちょっと時間があるときにでもぜひ読んでみてください。

※以下庭新聞P4参照『ざくざくと形づくる』

しつけとは、親から教え込まれたりあるいは習い事をして何かを身に付けるといったイメージがあると思います。でもね、「しつけ糸」というものは、服を作る際に布が“ずれたり”“形が崩れないように”仮でザクザクと荒く縫いつけるというもの。そうやって“おおよその形”をつくってから本縫いをしますよね。服が出来上がるとしつけ糸は抜いてしまう。だけどきれいに服を縫い上げるにはとても重要な役割を果たしているんだ。『しつけ』とは、その人が、その人らしく生きていくために必要なことをザクザクと荒く形作ってあげることだと思う。つまり、しつけって“大人が描いた理想の姿を子どもに押し付けるってことではないんだ。

『しつけ』の言葉の中には、『自律』という言葉が隠されています。社会の中で生きていく為に人と心地よく関わる為の方法を身に付け、人と関わっていく為の訓

練とも言えます。毎日の生活の中で友達と関わったり大人に繰り返し伝えられたりしながら獲得していくものだと思います。自分が「心地よい」と感じる経験をたくさん積んでいくことでしつけ糸が取れても自分らしく居られる人になっていけると思います。色々な人とかかわりながら自分の気持ちを知る事、人の気持ちを理解ること、自分が良いと思えることをすることが「しつけの目的ではないでしょうか。



絵本で育まれるもの♡

絵本を読むことは、子どもと大人の両方にとって、その時間そのものが喜びの時間です。今回は絵本から得られたよこびが、子どもたちの未来に向けてどんな力になっていくのかと言うお話です。絵本には必ず読み手が必要です。いつも忙しくしているお父さんやお母さんが、絵本を読むときだけは自分の為だけに時間をつかってくれます。絵本を読むには、家事をしなからでは出来ませんよね。大好きなひとに寄り添って聞くお話の世界は、それだけで子どもたちにとって大きな喜びであるに違いありません。そのお話が素敵なお話であればなおのこと、お話の楽しさを大好きなひとと共有するひときは充実して満ち足りた時間となるでしょう。一日のほんの10分間でも、毎日このような時間を親子で積み重ねていくことで、子どもたちは自分が大切にされていること、愛されていることが実感でき、しっかりと自己肯定感※を持つことが出来るようになります。この力が生きる力の基礎となり、基本的信頼感や安定根を確かなものにしていきます。特に兄弟のお子さんは、妹弟が眠ってからお父さん・お母さんを独り占めでき、たっぷり甘えることが出来る絵本の時間はかけがえのないひとときとなるでしょう。そのような丁寧な関わりにより気持ちの安定に繋がり、兄弟姉妹関係がより良い関係となっていくことでしょう。園では、みんなで大好きな絵本を繰り返し読んだり、膝の上に座って一対一で絵本を楽しんでいます。子どもと大人の絆がより一層深まり、“自分はここにいていい”“ここは自分の居場所”と認識し、その子がその人らしく生活できるといいなと思っています。絵本は、形あるものでありながら、それを通して育まれるものは豊かな感情や愛情の体験など、目には見えないものです。しっかりと大地に張り巡らされた樹木の根のように、人間にとっても、植物にとっても、本当に大切なものは外からは見えないものなのでしょう。乳幼児期は、根っこを育てる時期であるがゆえにその大切さが改めて実感できます。

※自己肯定感とは、“自分は自分であって大丈夫”と認められる感覚のことであり、生きていく為の基盤となる重要な力ともいわれています。

こぐまちゃん
シリーズ
作 わかやま けん

保育士のおすすめ絵本 紹介 <渡部 理恵>

カラフルな見た目と表情の読み取れないくまさんの絵…。短い文章の中に様々な思いを入れて読めてしまうこのシリーズは、気がつけばいつも身近にあった絵本でした。

大人になってこの絵本を買いはじめ、どんどん増えていき仕事での使用から子育てのアイテムになり、我が子が「読んで～」と持ってくる絵本の中に自然とこのこぐまちゃんシリーズも混じっていました。はっきりとした色彩に「美的センスでも育ててくれればな～」…なんて、淡い期待も抱いていた時期もあり(笑)、仕事柄同じようなことを園児の子たちにも思って読んでいた記憶があります。

このおたよりを書くにあたって、大きくなった我が子に「印象に残っている絵本ってあったりするの～？」と聞いてみたところ、「えー覚えてないよ～！…でも、くまの絵本はなんとなく読んでもらった記憶があるかも…」と言っていて、美的センスは全く育たなかったけど、やはり印象に残る絵本なことは確かなようでした♪

(←特にこの3冊が良く読まれていました！)

